なごや文化情報

2015
3・4
March / April

No.361

NAGOYA
Cultural
Information

特集／2014　1年をふりかえって
平成26年度名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2015
3・4
March / April

Contents

名古屋市民文芸祭　受賞作品…… 2
2014　1年をふりかえって…… 3
平成26年度　名古屋市芸術賞…… 9
平成26年度　名古屋市民芸術祭賞…… 10
おしらせ…… 12

「なごや文化情報」編集委員
倉知外子（現代舞踊家）
酒井晶代（愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授）
田中由紀子（美術批評／ライター）
はせひろいち（劇作家･演出家）
米田真理（朝日大学経営学部准教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

表紙

作品
「春の訪れ」
（1988年／和紙／200×120㎝）

富士山への7日間のスケッチ旅行が、心の財産になって人生を楽しくしてくれた。その思い出が円熟していき、尊い宝となった。

加納 俊治（かのう としはる）

1929年　旧愛知県小原村（現 豊田市）生まれ
1948年　工芸家 藤井達吉に師事
1958年　漆芸家 高橋節郎に師事
1970年　日展特選　北斗賞受賞
1990年　日本現代工芸美術展　内閣総理大臣賞受賞
現　　在　日展参与・現代工芸美術家協会参事

「2013年　名古屋市民文芸祭」
（第六四回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部 受賞作品より

※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市教育委員会賞◆

名古屋市立守山東中学校1年
町田　視瑠

宇宙の中で

ピンポン玉　ある
たくさん　ある
水色・灰色・赤色
たくさん　ある
真っ黒い空に
静かにある

ホタル　いる
たくさん　いる
黒い空に
たくさん　いる
かがやいて
ただ　さびしく

星達の中で感じる
孤立感

2014 1年をふりかえって

洋 舞 長谷 義隆(中日新聞放送芸能部編集委員)

女性が圧倒的だった日本のバレエ界に、新世代の「バレエ男子」が台頭した年だった。舞踊家二世ではない、バレエに魅せられた若者たちである。

若手の登竜門ローザンヌ国際バレエコンクール、ユース・アメリカ・グランプリで二冠となった長野県松本市の高校生二山治雄はその代表格。同世代、とりわけ1996年あたりに生まれた男子たちが切磋琢磨の中でもまれ、名古屋を中心とする東海地方でも、続々難関を突破し欧米などの名門バレエ学校に留学する一群の若手が出た。

ロシアのボリショイ・バレエ学校の久野直哉、太田厚徳。ベルリン国立バレエ学校の小川尚宏、後藤匡聡。ワシントン・バレエアカデミーの太田寛仁。ハンガリー国立バレエ学校の花村荘大。オーストラリア国立バレエ学校の楠神貴大たちである。10代から20歳そこそこのホープだ。

彼らが海外で研さんを積み、将来は日本の、名古屋のバレエをリードしていくことを期待したい。しかし、彼らの受け皿となりうるカンパニーが今の名古屋にあるだろうか。群小乱立で分散している在野の力を結集すれば、特色あるカンパニーができるはずだが…。

さて、名古屋勢の定期公演では古典の全幕バレエに収穫があった。川口節子バレエ団の「眠れる森の美女」、越智インターナショナルバレエの「海賊」、岡田純奈バレエ団創立50周年の記念公演「白鳥の湖」などである。

しかし「くるみ割り人形」は年末に4団体が競合。松岡伶子、川口節子、テアテル・ド・バレエカンパニー、越智バレエが個性を競ったが、同じ演目の重複はできれば避けたい。役員体制を刷新した日本バレエ協会中部支部で、会員間で調整できるものは事前調整すべきだと思う。

創作バレエに目を転じると、市川透が率いる「BALLET NEXT」が「春の雪」を5年ぶり再演。再演版の終章、ダンサー20数人が16分間踊りっぱなし、豊饒の海を想起させる生命賛歌を歌い上げた。佐々智恵子バレエ団は団長神戸珠利振付による「シルヴィア」を上演。神々のエロスを巡るドラマを一幕ものにすっきりまとめた。テアトル・ド・バレエカンパニーは、井口裕之の新作「ビッグベア」で、「汚れ」をキーワードに現代社会の病根に笑いと風刺で切り込んだ。

森高子バレエ教室のスペシャルコンサートは、創作と古典を一挙14作品を上演。新興勢らしい覇気があった。

主役級では、碓氷悠太が地元だけでなく関西でも活躍。踊り、演技に深みが増した。山本佳奈は心技体そろって充実。「白鳥の湖」オデットは、名古屋を代表するプリマバレリーナの1人に数えてよい出来栄えだった。

現代舞踊では、病魔と向き合った倉知可英「踊りたいけど踊れない」は渾身のソロ。現代舞踊協会中部支部の新人公演は身体能力に優れた新顔が登場し活気が出た。ジャズダンスでは、三代真史がアイルトン・セナとマイケル・ジャクソンにささげたソロ作品。切り詰めた表現に円熟味があった。フラメンコでは、若手の石川慶子が長編の創作を発表。新世代の波動を感じさせた。

戦後名古屋のバレエの先駆者、佐々智恵子氏が長逝した。

留学先から一時帰国したバレエ男子ホープたち。
左から、久野直哉、太田厚徳、楠神貴大、後藤匡聡

演 劇 安住 恭子(演劇評論家)

2014年はベテランが着実にいい舞台を創った印象が強い。それも新作だけでなく、旧作に光を当て、きちんと甦らせる作業があった。それが演劇を豊かにしたように思う。

まず佃典彦が、文学座に書き下ろして岸田戯曲賞を受賞した『ぬけがら』(5月末～6月初)を、自身の劇団B級遊撃隊のプロデュース公演として上演した。自ら演出し、平塚直隆や鹿目

由紀ら劇作家たちも出演するという、名古屋演劇人の力を結集した舞台だ。しかもロイ・シートウ演出の香港話劇団版との2本立てのイベントである。この競演によって、認知症の父親が脱皮して若返っていくという奇想天外な発想だけが評価されがちだった『ぬけがら』の、本質的な魅力と広がりを改めて示した。佃演出が示したのは、脱皮の堆積である生の必死さ切実さと、ある時期その生が重なりつつすれちがう親と子の永遠の命の連鎖だ。ドライで軽やかな作風の中に、生と死の深い意味を覗かせた。一方香港話劇団版は、最後に巨大な飛行機を登場させるなど、失業と離婚に追いつめられた息子の心情をコミカルかつ情緒的に演出し、また違った光を当てた。佃は新作『朝顔』(神谷尚吾演出、11月)でも密度の高い作品を作り、作家としての充実ぶりを示した。

劇団B級遊撃隊「ぬけがら」撮影:佐藤元紀

栗木英章も、10年前に劇団名古屋に書いた『美ら海』を、自身の劇団名芸で上演した(高村真一演出、11月)。アマチュアカメラマンでもある名古屋の主婦が、沖縄の辺野古に旅し、基地建設に反対する人々と交流を重ねる中で、沖縄の歴史と現実を知る話である。朝鮮半島から来た女性の姿など、戦争の傷が今なお残ることもふくめ、沖縄に生きる庶民の姿をいきいきと描いた。そして一見豊かな彼女自身の家庭が抱える問題も、根は一つと思わせた。

また『美ら海』の初演のように社会問題を追求している劇団名古屋も、33年前のふじたあさやの戯曲を再演した。『臨海幻想』(久保田明演出、6月)。被爆して亡くなった原子力発

劇団名芸「美ら海」

電所の労働者をめぐる物語で、まさに2011年の原発事故を先取りする内容だ。30年前も今も何一つ変わっていないことを示した。

劇団ジャブジャブサーキットが16年ぶりに再演した『非常怪談』(はせひろいち作・演出、11月)も見応えがあった。父親が亡くなった通夜の話。誰もが無防備になる台所を舞台に、物の怪たちも出入りして…という話で、人も物の怪も思わず知らず互いが互いを支え合っているということを、ミステリアスかつユーモラスに描いた。初演時よりも練り上げられ、幅広い人に親しめる作品であることを示した。

新作では北村想の戯曲が飛び抜けていた。avecビーズの『あたしあのあめにうたれて』(小林正和演出、2月)。「走れメロス」の話や歌謡曲の歌詞を織り交ぜた一見でたらめな展開だが、それらを通して言葉と想像力、虚構と現実について語る実験劇である。演劇という表現行為の意味を突きつめ、その思考を楽しく繰り広げた。その楽しみつつ刺激に満ちた舞台には、演劇を見る醍醐味があった。

また、にぎやかなパンク歌舞伎に取り組んできた原智彦のハラプロジェクトが、一転して渋いせりふ劇を見せたのも収穫だった。武田泰淳の小説による『ひかりごけ』(原演出、4月)。戦争末期に実際に起こった人肉食事件を扱った作品で、倫理と命という重いテーマを、抑制の効いた演技で見せた。

洋　楽　早川 立大(音楽ジャーナリスト)

この地方の音楽界は、景気回復を実感できない状態が続く中、耳をそばだてさせるような大きな催し、派手な行事はなかったものの、総じて着実な足取りを見せたといえよう。

[声楽]オペラ、オペレッタでは、名古屋二期会がヨハン・シュトラウスの『こうもり』で気を吐いた(12月6、7日、愛知県芸術劇場大ホール)。ダブル・キャスト制で、歌手陣の出来栄えにばらつきはあったものの、三浦安浩の新鮮な演出、飯守泰次郎指揮の充実した音楽もあって、全体としては味わい深い好演だった。名古屋二期会はこのほか、レハールの『メリー・ウィドウ』(3月15、16日、名古屋市西文化小劇場)、モーツァルトの『コシ・ファン・トゥッテ』(4月5、6日、名古屋市東文化小劇場)を小規模上演した。地道な活動は光る。

歴史のあるアマチュア合唱団グリーン・エコーがシュニトケの原爆を主題としたオラトリオ『長崎』などを取り上げた(5月

24日、愛知県芸術劇場コンサートホール)。演奏の見事さ以上に、現在の日本のおかしな政治状況に対し重い意味を突き付ける演奏会だった。リサイタルではヴェテラン勢が活躍。ソプラノ山口雅子は日本民謡やオペラ『夕鶴』の抜粋で格調の高い歌唱を繰り広げ、名古屋市民芸術祭賞に輝いた(10月12日、名古屋能楽堂)。メゾソプラノの大橋多美子(2月21日、宗次ホール)、ソプラノの伊藤晶子(10月11日、名古屋能楽堂)や荻野砂和子(10月29日、電気文化会館ザ・コンサートホール)、佐地多美(11月15日、同)も持ち味を発揮し、若手・中堅の範となろう。

[器楽]オーケストラでは、レオシュ・スワロフスキーが音楽監督に就任したセントラル愛知交響楽団が好調を保った。丹羽明の新作オペラ『白峯』を演奏会形式で初演(井崎正浩指揮、9月26日、しらかわホール)し、東京公演も行った。また、円熟味を増した松尾葉子(特別客演指揮者)がメンデルスゾーンの『スコットランド』交響曲などを振って、近年最良の定期公演のひとつを現出した(11月21日、同)。名古屋フィルハーモニー交響楽団はさまざまな作曲家の第1番、初演、演奏家の名フィル初登場など「ファースト」シリーズで斬新なプログラムを組み、毎回刺激的な演奏によって広く注目を集めた。「愛知で5番目のプロのオーケストラ」名古屋室内管弦楽団が旗揚げ定期公演をした(9月5日、しらかわホール)。

室内楽ではラヴェルの室内楽全曲演奏会を完結させたピアノの桑野郁子とヴァイオリンの古井麻美子のコンビ「アンディアーモ」が好企画の好演で、名古屋市民芸術祭の特別賞(企画賞)に選ばれた(11月22日、電気文化会館ザ・コンサートホール)。公演数の多いピアノでは、2台のピアノによるプーランクやストラヴィンスキー作品を取り上げた田中一美&藤本真実(6月4日、同)と、シューマンの「クライスレリーナ」などで自然体の美しさを極めた原田綾子(3月15日、同)の秀演に指を屈する。ピアノ以外では、いずれも宗次ホールでの3つのチェロ・リサイタルを挙げる。平野一郎の「たらちねのうた」「伽羅奢」などを取り上げた天野武子(7月12日)は大家の円熟を、バッハの無伴奏チェロ組曲全6曲に挑んだ古川展生(9月27日)は軽やかな多彩さを、若い作曲家酒井健治への委嘱作品を世界初演した中木健二(10月18日)は入念な仕上げを示した。

宗次ホールが自主公演年間400回を目指し今池地区では5/Rホール&ギャラリーやHITOMIホールが小会場の利を生かした企画を増やす一方、しらかわホールが主催公演を終了した。「時は移る」の感慨が深い。

名古屋二期会「こうもり」

中木健二「B→C〜バッハからコンテンポラリーへ〜」

能楽 竹尾 邦太郎(能楽評論家)

1月3日、名古屋能楽堂『正月特別公演』注連が張られ清爽の気が漲る舞台は恒例の「翁」一昨年に続く観世流久田勘鷗、ゆったりした翁舞に風格をみせ、先立つ「千歳」に嗣子久田勘吉郎の鋭気。「三本柱」大果報者・大野弘之、普請の用材三本を太郎・次郎・三郎の三冠者に一人宛二本持ち帰れの謎掛け。試行錯誤の末に解けた喜びに此のまま帰るのも、と賑やかに囃子物での帰還、相好を崩し満足気な大果報者に滋味。

3月『名古屋能楽堂定例公演』「花筐」越前に住む皇子、皇位継承のため急遽上京、残された文と花籠に愁嘆の照日ノ前(シテ衣斐正宜)はその花籠を侍女(ツレ愛)に持たせ跡を追う。運好く出合うも届かぬ帝への恋慕の情に、漢帝と李夫人の故事をなぞらえ狂おしく舞う照日ノ前、熱情が通じたか花籠が極め手となり再会を果す。

4月『青陽会』「天鼓・弄鼓ノ舞」懐妊中、天から鼓が降る夢で天鼓と名付けられた子、後これが正夢となり、鼓の妙音は噂で帝に届く。帝が鼓を召し上げんとすれば、拒む天鼓は呂水に沈められ鼓は没収。しかし誰が打つも鳴らず、天鼓の父・王伯(シテ久田勘鷗)が呼ばれ、固辞するも打てば妙音、撥取り落し虚脱してくずおれる辺り如実。後場、管絃講で弔

われる喜びに天鼓ノ霊（後シテ勘鷗）は小書「弄鼓ノ舞」で字儀通り鼓に戯れる心、太鼓入で華やか、大幅に詞章を省き舞に重きを置く。舞台狭しと欣喜雀躍「水に戯れ波を穿ち」と喜々として水に興じる風情の稚気捨て難い。

青陽会「天鼓・弄鼓ノ舞」久田勘鷗（シテ）
撮影:能楽写真家協会　杉浦賢次

5月『西村同門会研究能』「春栄」宇治橋合戦で虜囚となった弟・増尾春栄（ワキツレ原 陸）を預かる高橋権頭（ワキ飯冨雅介）の許を訪ねる兄・増尾種直（シテ長田 驍）ワキの執り成しで弟に会うが、弟は後難を恐れ兄に非ずと強弁。しかし兄が自刃も覚悟と知り許しを乞えば、互いを思いやる兄弟愛に感涙のワキ、ワキ自身も合戦で我子を亡くし、春栄を後嗣に貰い受けたいと兄に吐露。そこへ鎌倉から虜囚を誅せよと。弟が断罪なら兄も、と各々形見を従者小太郎（トモ松井俊介）に托し従容と死に就くところ、赦免状を齎す早打（ワキツレ橋本 叡）。「ああ嬉しい」とワキ、吼えたい程の兄弟、ワキは改めて春栄を後嗣に貰い受け、重代の太刀を贈り目出度く祝宴に。ワキ方の活躍する比重の大きい稀曲、本来、春栄は子方の役、余程優秀な子方でないと舞台は成らないが若いワキ方を起用、充実の舞台。

『第57回やるまい会』「唐人子宝」主（アド井上松次郎）が召使う唐人趙観（シテ野村又三郎）の唐子兄弟が父の帰国を願い宝物を携え来日、趙観は帰国を願うが法の壁、しかし二人の孝心に免じ帰国が許されれば日本生れの今若も共にと。聞いて激怒の主、ならば皆帰国させぬとなって、趙観は入水を、唐子兄弟は刺し違えてと言い出す騒ぎに主は木石に非ず「疾く疾く帰国を急ぐべし」と。趙観は「有難の御事や」と喜々として舞い大団円。可憐さに健気さのある確りした子方を得て稀曲に精彩。それにしても北の拉致被害者、一日も早い帰国を願うや切。

第57回やるまい会「唐人子宝」
左より野村信朗、奥津健一郎、井上蒼大、野村又三郎（シテ）の後
奥津健太郎、伊藤泰、井上松次郎（アド）
撮影:能楽写真家協会　杉浦賢次

9月『第2回　演能空間』「葵上」妬心に駆られ光源氏ノ妻・葵上に憑く六条御息所ノ生霊（シテ和久荘太郎）、病床に寄り「恨みは更に尽きすまじ」と居立ちキッと面切る怖さ。後場、祈り伏せんとする横川ノ小聖（ワキ宝生欣哉）に反撃、柱巻にみせる苦悶の姿に狂気が。

10月『淡交会90周年記念能』「猩々乱」重い習物、久田勘吉郎披キ。「乱」は酔余、波に遊び戯れる心。波を蹴り上げる乱レ足、流れに乗る流レ足など活き活きした若さの躍動、立派に舞い上げる。

邦舞邦楽　北島 徹也（CBC テレビ　音楽祭・イベント事業部 専任部長）

今年の西川流「名古屋をどり」（9月3～7日、中日劇場）は、家元の右近が総師（そうし）、千雅が四世家元を継承する「継承披露」として、例年に増して力の入った公演だった。素踊『船弁慶』は出色、静の右近が良い。端正に舞う静は記憶の残像を訴え、知盛は妖気をよく含んだ。『新作舞踊小芝居 平成版・NARAKA 一丁目』は現代の風刺に笑いが湧くが、きちんと振り付けられた作品。西川長寿は「長寿の会」（5月10日、日本特殊陶業市民会館）で米寿を自祝、『木賊苅』『ふきよせ』を機嫌よく踊った。西川真乃女は「しのじょ舞の会」（5月12日、興正寺）で地歌『虫の音』に挑戦、濃厚な恋の気配を漂わせた。「ももの標」（5月24日、名古屋市芸術創造センター）で西川ももよは静御前と巴御前を取り上げ、物語性を排して恋する女性というモチーフの表現に迫った。西川鯉之亟と鯉娘の「ふたり華」（11月1日、市民会館）では西川あやめが元気な姿を見せたのも嬉しい。

花柳梅奈香は「梅奈香会」（4月20日、市民会館）でシャンソンとの即興で踊る試みが印象に残り、「花衛会」（5月18日、市民会館）花柳衛宗『山姥』は熟達の技芸。「美優会」（6月8日、市民会館）は花柳磐を偲んで『幻お七』（花柳磐優）と『京鹿子娘道成寺』（磐優愛）。

寿子が宗家、有美が三代目家元となって初めての「内田流舞踊会」（6月21日、市民会館）、有美は『いろは道成寺』に新振付、寿子は『獅子の乱曲』で風格。「内田るり美知 舞踊の会」（9月6日、名古屋能楽堂）では『時雨西行』は寿子の江口の君の動に対し、西行法師のるり美知が位高く見えた。

「赤堀加鶴繪舞踊会」（6月1日、市民会館）の創作『妖惑』は

美しい色彩の抽象画を思わせた。

稲垣友紀子「豊美会」(8月2日、能楽堂)は角々が立った舞比の『連獅子』、友紀子『島の千歳』はゆったりと舞った。

「工藤会」(8月29日、中日劇場)で家元 倉鍵は『幻椀久』。

「園美の会舞踊公演 」(10月25日、能楽堂)第 1 部「第四回 桜美の会」は名古屋市民芸術祭2014に参加し、五條園八王と五條美佳園の二人が力演、園八王は『お夏狂乱』美佳園は『お七恋慕』を、また二人の創作『清姫』で清らかさと執念の相剋を二人一役で踊り分け、市民芸術祭特別賞を得た。第2 部「五條園美リサイタル」は「西行法師行脚の途」として『時雨西行』『桜づくし』『八島』の三題。

名古屋市主催「やっとかめ文化祭」の一つとして「能舞台に舞う ～今をときめく日本舞踊家の競演～」(11月3日、能楽堂)が催され、工藤彩夏、春佳の『二人三番叟』、五條園小美、佳穂、佳菜は『藤娘』で独特の演出、花柳朱実、寿麗永は素踊『連獅子』、稲垣舞比、豊由希は得意な『小鍛冶』、内田有美は『新道成寺』。

また、三年ぶりの「中京五流舞踊公演」が(12月21日、中日劇場)は藤間式部が格調高く『四季の山姥』、赤堀加鶴繪、昭奈、恵緒は『元禄花見踊』で早くも花の風情、西川千雅、真乃女の『正札附』は千雅の荒事味が足りないが真乃女が巧み。工藤倉鍵、寿々弥『二人椀久』は夫妻の程良い馴れが良く、『雪月花』三題のうち『土手の月』のたまらぬ洒落気が楽しかった。

邦楽では、杵屋三太郎が「杵三会」(9月23日、今池ガスホール)、杵屋六秋 六春が「長唄おやこ会」(11月15日、今池ガスホール)を催した。平野春海と岡崎美奈江「箏三絃ジョイントリサイタル」(10月18日、電気文化会館ザ・コンサートホール)では地歌演奏の難しさを思った。

今年は「菊の会」を主宰していた竹内菊さんが5月29日に87歳で、この地域の古典芸能の評論を長年執筆された岡安辰雄さんが5月31日に80歳で亡くなられた。ご冥福をお祈りする。

日本舞踊西川流 名古屋をどり『船弁慶』

園美の会舞踊公演 第四回桜美の会『清姫』

美 術 日沖 隆(美術批評)

現代美術はますます多様な価値観に彩られている。美術家たちの創造精神は今なお、拡散を続けている。私たち観客の側も戸惑うばかりで、必然、固定的なアート認識を改め、常に虚心に作品から学んでいく必要がある。例年、地元美術館では、その変革精神の歩みを示す企画が催されているが、今年は先端的な様相をあらわすコレクション展に、充実感があった。

名古屋市美術館の「マインドフルネス!高橋コレクション展2014」(4−6月)がそれで、すでに他の地域で話題になったとはいえ、奈良美智や草間弥生ら、今日の魅力的な作家の作品を一堂に介して、現在の日本の一断面を切りとっていた。

さらには、同美術館で開かれた「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展—ヤゲオ財団コレクションより」(9−10月)は、ゲルハルトリヒターなどの世界的著名美術家の作品紹介で、高橋コレクションとの対比でみても、日本と世界の美術意識の違いを示し、アートとは何かについて考えさせられた。どちらも外部のコレクターの収集に依存している展示ではあったが、内容が秀逸であり、地元の美術界の刺激になったのではないか。

一方、愛知県美術館の企画においての「あなたのリアル、わたしのリアル」(6−7月)は地元作家の同美術館の所蔵するコレクションを通して、何気なく使われている「写実—リアル」の意味を問いかけ、帰納法的にテーマを引き出す好企画といえた。

また、今年も「写真」の現在を示す企画が相次いだのは時代の流れか。愛知県美の「これからの写真」—光源はいくつもある(8−9月)は、平面写真のみならず、映像、立体を組み合わせながら、絵画や彫刻では不可能なアートとして、アートの概念の拡大を促す内容になっていた。豊田市美術館の写真展「荒木経惟 往生写集—顔・空景・道」(4−6月)も、対象に注ぐ独特の感性に不思議な日常感覚の味わいを感じた。また、この豊田市美の「ジャン・フォートリエ」展の回顧展は戦後の美術史の一ページを飾る重要作家の展示で美学的価値を十分示す紹介だった。

ギャラリー展示では、STANDING　PINEで開かれた「トーンプラント―ケース3」（グループ“intext”）（8−9月）が出色であり、注目に値した。印刷された文字を円盤に回転させたり、光を透過させたりして、文字・活字というメディウムの再翻訳に踏み込んでいた。同ギャラリーの「設楽知昭展」の展開、11月の「杉山健司展」の眼球に遠近法を包含した作品展開のユニークさは（写真）、高く評価されるべきだろう。

絵画では、ガレリアフィナルテの「O JUN&HideoTOGAWA」（1−2月）、「松浦寿夫&児玉靖枝展」（6−7月）の二人展が秀逸だった。さらに同ギャラリーの鈴木雅明「風景と塊」（9−10月）に、対象、奥行、空間、塊という問題意識を感じた。

杉山健司展

また、ケンジ・タキギャラリーの「塩田千春」のヴェネツィア・ビエンナーレの報告展、「戸谷成雄展」の息の長い充実ぶりも見逃せない。

一方、郊外の新設画廊の活動が目立ち始めている。ギャラリーノイボイの「竹内孝和」のひび割れた土のインスタレーション（仮設設置）の迫力、「徳重道朗／spatiai oligue」（写真・7月）の、斜角的視覚の追及にも意欲的な実験性が溢れていた。

徳重道朗「spatiai oligue」

文　学　清水 良典（文芸評論家・愛知淑徳大学教授）

年末に東京で作家の町田康氏に会ったとき、「最近、名古屋は盛り上がっているみたいですね」と話しかけられた。何がどう、とは訊き返さなかったが、そのように見られているのは面白かった。諏訪哲史をはじめ、広小路尚祈、墨谷渉、荻世いをら、吉川トリコなど若手作家が活躍しているだけではなかろう。昨年も本欄で紹介した岡崎の出版社、景文館書店による『吉田知子選集』がついに三巻完結したのも、東京から見れば「名古屋」圏の驚くに値する文学事業に違いない。その最終巻『Ⅲそら』の内容は、長年の吉田文学の精髄というべき短編が選ばれ、読んだ者を驚愕させたはずである。それに合わせて市内の「文化のみち　二葉館」では2月から3月にかけて「吉田知子展」が開かれ、記念トークイベント「吉田知子が描いてきたもの」も盛況のうちに行われた。

映画監督として著名な園子温が、故郷の豊川を舞台とした異色のホラー・サスペンス小説『毛深い闇』（河出書房新社）を発表したことも、無縁ではない。「片田舎」の退屈さの中から恐るべき闇の力が溢れだすストーリーは、昨年に村上春樹が名古屋を舞台にして発表した長編『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』とも構造が重なる。大いなる田舎性と前衛性が同居する名古屋の特性は、現代も不変なのだ。その名古屋で前衛表現の砦となってきた小劇場、七ツ寺共同スタジオの40周年を記念して刊行された『空間の祝祭Ⅱ』（あるむ）には、諏訪をはじめ多くの文化各界の論客が寄稿し、ジャンルを超えて先鋭な表現を目指す息吹が文章から匂い立っていた。

諏訪哲史と野口あや子のトークイベント

広小路尚祈と津村記久子のトークイベント

さて諏訪哲史は、中日新聞に連載していた書物愛に満ちたエッセイ『偏愛蔵書室』（国書刊行会）を刊行した。移り変わり捨てられていく商品としての書物ではなく、秘匿するように愛蔵する異色の書物を語る言葉が深く熱かった。名古屋の書店が中心となって大規模に行われているブックマークナゴヤでも刊行を記念して、彼の愛知淑徳大学でのゼミの教え子である歌人、野口あや子とのトークイベント「読む／詠むということ――世界の聴き方・うたい方の話」が行われた。新刊『清とこの夜』（中央公論新社）を出した広小路尚祈と、芥川賞作家、津村記久子との顔合わせのトークイベント「やりたいことは二度寝だけ、って本当ですか?」も、同じくブックマークナゴヤの一環で行われた。

平成26年度 名古屋市芸術賞

平成26年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後も名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

西川右近（にしかわうこん） 伝統芸能【日本舞踊】 名古屋市千種区在住

昭和14(1939)年、西川流二世家元西川鯉三郎の長男として生まれ、3歳で初舞台を踏む。昭和31(1956)年より西川右近の名で本格的に活動を始める。昭和56(1981)年、先代が創始した「名古屋をどり」を継承し、主宰となる。昭和58(1983)年には西川流家元を継承。

先代没後、自身の制作・作舞・出演のほか、創作劇の書き下ろしなど、「名古屋をどり」をはじめとする舞踊の脚本・振付に多彩な力量を発揮するとともに、アメリカやモナコなどでの公演を行い、日本舞踊の国際化に努めるなど、その普及・発展のために力を注いだ。

これらの事業のほか、平成17(2005)年には「愛・地球博」前夜祭セレモニーの振付・プロデュースを手掛けたほか、名古屋二期会公演の演出など、活躍の場を広げてきた。また平成18(2006)年には、中京大学の湯浅景元教授と共に創案した和のフィットネス「NOSS(ノス)」が高齢者の介護予防事業として高く評価され、厚生労働省支援事業にも採用されるなど、新境地も開拓している。

平成26(2014)年、第67回の「名古屋をどり」の終演をもって西川千雅に家元を継承。自身は西川流総師として引き続き後進の育成や日本舞踊の普及・拡大に尽力しており、これまで当地の芸術文化の振興に果たしてきた功績は多大である。

芸術奨励賞

大﨑のぶゆき（おおさき） 美術【現代美術】 名古屋市名東区在住

平成12(2000)年、京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻(版画)修了。在学中より自身のリアリティをテーマに、セルフポートレイトを用いた作品制作を開始。これまで当地域のみならず、東京、関西圏をはじめドイツなど、国内外で数多くの個展を開催するほか、展覧会への出品やワークショップ、講演活動を精力的に行っている。活動初期は版画や平面作品を中心に発表していたが、年を重ねるにつれて立体やインスタレーション、映像作品と手法の幅を広げ、自分自身、ひいては人間の持つ外界や内面に対する認識やリアリティの曖昧さを探求し続けており、この「リアリティの不確かさ」をテーマとした深い洞察の試みは高く評価されている。近年では、平成21(2009)年の「第12回文化庁メディア芸術祭」審査委員会推薦出品をはじめ、平成24(2012)年の名古屋市美術館「ポジション2012　名古屋発現代美術　この場所から見る世界」、兵庫県立美術館「キュレーターからのメッセージ 2012　現代絵画のいま」など企画展への招へい出品や、平成25(2013)年の「VOCA展2013 現代美術の展望―新しい平面の作家たち」での佳作賞受賞など、活発な活動が続いている。

また、平成19(2007)年より愛知県立芸術大学講師、平成24(2012)年より同大准教授および名古屋大学非常勤講師として後進の指導にも熱心であり、今後の更なる活躍が期待される。

佐藤克久（さとうかつひさ） 美術【絵画】 名古屋市西区在住

平成11(1999)年、愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻を修了。活動当初は概念的な立体作品や写真作品を発表していたが、近年は絵画形式を中心に制作。カンバスを立体的に扱うなど、活動初期のコンセプトも活かしながら、抽象画・具象画を問わず多彩な作品を発表している。自身の個展は、平成15(2003)年の「a cup of a cup of」(switch point、東京)をはじめ、名古屋、東京を中心に多数開催。また、平成19(2007)年の「City_net Asia 2007」(ソウル市立美術館)を皮切りに、恩師と世界的アーティストたちとの展覧会となった平成21(2009)年の「放課後のはらっぱ―櫃田伸也とその教え子たち」(愛知県美術館、名古屋市美術館)、出品作品がパブリックコレクションとして収蔵された平成24(2012)年の「リアル・ジャパネスク：世界の中の日本現代美術」(国立国際美術館)など、意欲的な企画展への招へい出展が続いている。

ワークショップの実施やアーティスト・トークへの登壇など、芸術普及活動への取り組みも積極的に行っているほか、他地域を拠点とする作家と名古屋の作家の交流を促し、互いの作品を紹介する展覧会を企画するなど、美術分野の発展・普及に努めている。

また、愛知県立芸術大学などで非常勤講師として後進の指導にもあたっており、今後の更なる活躍が期待される。

西尾典祐（にしおのりすけ） 文芸【伝記】 名古屋市中川区在住

高校卒業後、事業を営む傍ら同人活動を続け、平成4(1992)年、中部経済新聞紙上に「自動車産業の底流」(20回)の連載を開始。平成8(1996)年「至誠・評伝新田長次郎」を上梓、新田長次郎の創設した松山大学の読書感想文課題図書指定を受ける。平成10(1998)年には、「梶井基次郎討論」で四日市ふるさと文学賞(文芸評論の部)佳作を受賞するなど、人物伝を中心とした執筆活動を行う一方で、平成8(1996)年よりボランティアとして、市の有形文化財に指定された「文化のみち橦木館(旧井元為三郎邸)」の運営・保全に長年携わり、現在はNPO法人橦木倶楽部の相談役となっている。これらの活動の中で得た知識をもとに、平成15(2003)年、豊田佐吉など橦木館周辺の武家屋敷町に居住した人々の生涯を描いた「東区橦木町界隈」を発表。

また、平成17(2005)年から平成20(2008)年まで、「文化のみち二葉館(名古屋市旧川上貞奴邸)」の副館長として、郷土ゆかりの文学資料の収集・活用業務に従事する中で、城山三郎をはじめとする多くの文学展を企画する。平成23(2011)年、城山三郎関連の資料をまとめ書き上げた「城山三郎伝―昭和を生きた気骨の作家」が中部ペンクラブ文学賞特別賞を受賞。名古屋にゆかりのある人々を豊富な資料に基づき生き生きと評伝にまとめ上げる作風には定評があり、今後の更なる活躍が期待される。

名古屋市民芸術祭2014　名古屋市民芸術祭賞

名古屋市では、平成26年10月から11月の2ヶ月間にわたり、全23事業（主催事業3、参加公演20）に及ぶ「名古屋市民芸術祭2014」を開催しました。その参加公演20公演（音楽8、演劇4、舞踊4、伝統芸能4）の中から、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に価する公演に対して「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（3公演）

10月12日（日）　名古屋能楽堂

音楽部門　平成24年度愛知県芸術文化選奨文化賞受賞記念 山口雅子ソプラノリサイタル

能楽堂の簡素ながら、いにしえの風格をたたえた空間を最大限に活用し、照明・衣裳を含めた総合的な演出が際立った企画性の高い公演であった。オペラ「夕鶴」は、“つう”の心理をクライマックスに向けて次第に高潮させていく山口雅子の歌唱力が聴衆を魅了した。さらに助演の“与ひょう”に井原義則、ピアニストに山下勝、“語り”にたかべしげこを迎え、共演陣とともに高い水準のオペラをシンプルな空間のなかに創りあげた。

プロフィール

73年　国立音楽大学声楽科卒業
82年　名古屋二期会オペラ「テレフォン」でデビュー
96年～熱田の森文化センター講師
97年～名鉄コミュニティーサロン植田講師
06年～一般社団法人名古屋二期会副理事長
08年～名古屋芸術大学講師
12年　名古屋市民芸術祭参加
13年　愛知県芸術文化選奨文化賞受賞

11月7日（金）～9日（日）
名古屋市千種文化小劇場

演劇部門　試験管ベビー33rd capsule「僕が地球を救ったら…」

家族愛の崩壊と再生を描いた創作作品であり、エンターテインメント性の高さが際立っていた。カルト、ブラック企業などの社会問題に対する批判を織り交ぜながらも、テンポ・スピード感があり、メリハリよくストーリーが展開する練り上げられた脚本で、幅広い市民層が楽しめる舞台をつくりあげた。普遍的なテーマである「幸せ探し」をユーモアにくるんだ笑いのなかで描きあげた秀逸な作品であった。

プロフィール

99年　試験管ベビー旗揚げ
04年　E－1グランプリ名古屋大会優勝、全国大会準優勝
06年　愛知県芸術劇場フェスティバル参加
07年　演劇博覧会「カラフル2」参加。最優秀作品賞
　　最優秀男優賞、優秀男優＆女優賞受賞
09年　名古屋市民芸術祭特別賞（アンサンブル賞）受賞
　　20th capsule「罪なき子供のヒドイ毒」
10年　名古屋市民芸術祭参加
　　22nd capsule「お前がオールドファッション買って
　　きたんだからお前が食えよ!」
13年　千種文化小劇場開館10周年記念事業
　　ちくさ座演劇祭参加28th capsule「試験管Festa!」

11月22日（土）
日本特殊陶業市民会館フォレストホール

舞踊部門　岡田純奈バレエ団創立50周年記念公演「白鳥の湖」〈全幕〉

創立50周年にふさわしく、バレエ団が一丸となって古典芸術の最高峰であるグランドバレエを上質なレベルで創りあげた。特に女性ダンサーたちの活躍は際立っており、オデット姫を演じた山本佳奈は、演劇性も豊かに物語を牽引した。さらに、ソリスト、コール・ド・バレエを団員で揃えるほど女性ダンサーが着実に育っていることも評価できる。
「白鳥の湖」のような大作を単独上演できるバレエ団は名古屋でも数少なく、それを創りあげた実力に将来性が期待できる。

プロフィール

83年　日中友好祭中国公演にて中国少年宮に作品を提供
00年　「サマーセミナー2000」にて公演及びバレエ
　　講習会を開催
　　刈谷市政50周年記念公演「くるみ割り人形」〈全幕〉
03年　刈谷文化賞受賞
05年　刈谷文化功労賞 団体の部受賞
10年　日露ジョイントコンサート開催
13年　第7回　舞踊文化功労賞受賞
14年　Japan Ballet Competition名古屋2014
　　最優秀指導者賞受賞

授賞式

名古屋市芸術賞、名古屋市民芸術祭賞の授賞式が下記のように開催されました。

日　時　平成27年2月2日（月）15:00

会　場　名古屋市役所本庁舎5階　正庁

名古屋市芸術賞

名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭特別賞（4公演）

11月22日（土）
電気文化会館ザ・コンサートホール

音楽部門（企画賞）　室内楽集団アンディアーモ ラヴェル室内楽全曲演奏会　ラヴェル～音の魔術師～ 第4回 最終夜

ラヴェルの室内楽を全4回にわたり全曲演奏する企画の最終公演であり、意欲的な挑戦の中に、音楽に真摯に向きあう姿勢と企画力の高さが感じられた。ピアノソロ、ピアノデュオ、ヴァイオリンとのデュオなど、ゲストを迎えての変化に富んだプログラムに加え、来場者に配布するパンフレットからも企画意図が随所に読み取れるなど、手抜きの無い取り組みにより、ラヴェルに多面的に光をあてることに成功した。

プロフィール
- 11年　仙台フィル復興支援チャリティーコンサートゲスト出演
- 12年　NHK−FM「名曲リサイタル」出演
- 13年　ラヴェル室内楽全曲演奏会　第1回
- 14年　ラヴェル室内楽全曲演奏会　第2回
- 　　ラヴェル室内楽全曲演奏会　第3回

10月2日（木）～5日（日）
名古屋市青少年交流プラザ

演劇部門（ハイクオリティー賞）　刈馬演劇設計社PLAN-06「誰も死なない」

安楽死・尊厳死をテーマに据えた簡潔な構成・緊密な会話で現代人の内面を描いた佳作であった。女性ばかり6人の出演者のアンサンブルの妙が舞台を弾ませ、病室を覆うカラフルな千羽鶴などの視覚美やユーモアの感覚にも優れていた。作・演出の刈馬カオスの個性が十分発揮された作品であった。

プロフィール
- 12年　劇団テラ・インコグニタを前身に始動
- 　　PLAN-01「悪恋」上演
- 13年　PLAN-02「クラッシュ・ワルツ」上演
- 　　PLAN-03「マイ・フェイバリット・バージン」上演
- 　　PLAN-04「クラッシュ・ワルツ」再演
- 　　「クラッシュ・ワルツ」が第19回劇作家協会新人戯曲賞受賞
- 14年　PLAN-05「76をめぐる暴言」上演
- 　　札幌教文演劇フェスティバル2014参加
- 　　「スリーピング・ダーティー」上演

10月24日（金）～25日（土）
名古屋市千種文化小劇場

舞踊部門（スピリット賞）　平成24年度名古屋市芸術奨励賞受賞記念公演 倉知可英DANCE YARD4

不屈の舞踊家魂に溢れ、身体表現の新境地を切り開く熱演で観衆を魅了した。現代舞踊家として一夜のうちに群舞、独舞、デュオの多彩な作品を創造し、振付家・ダンサーとして高いレベルで表現した。特に「踊りたいけど踊れない」は、ダンスによる私的告白にとどまらず優れた身体表現として昇華しており、逆境を乗り越えようとする強さは感動的であった。

プロフィール
- 75年　奥田敏子舞踊研究所入所
- 95年　こうべ洋舞コンクール創作部門優秀賞受賞
- 96年　倉知可英 DANCE YARD1
- 98年　愛知県新進芸術家海外補助事業の助成を受け、フランス・グルノーブル国立振付センターで2年間研修。
- 03年　倉知可英DANCE YARD2
- 09年　倉知可英DANCE YARD3
- 13年　平成24年度名古屋市芸術奨励賞受賞

10月25日（土）　名古屋能楽堂

伝統芸能部門（奨励賞）　園美の会舞踊公演 一部　第四回桜美の会

五條流の新進気鋭・五條園八王と五條美佳園の二人会。名古屋ゆかりの坪内逍遥の作品「お夏狂乱」、「お七吉三」をそれぞれ一人ずつ演じ切り、創作作品「清姫」では清姫の相剋する二面性を二人で演じ分けた。一貫して女の情念をテーマに採り上げた意欲的で企画性に富んだ公演内容であり、日本舞踊家二人の将来性を大いに期待できる公演であった。

プロフィール
- 07年　第一回桜美の会
- 10年　第二回桜美の会
- 12年　オケ日舞披露演の会（セントラル愛知交響楽団とのコラボレーション）
- 　　第三回桜美の会
- 13年　オケ日舞披露演の会（セントラル愛知交響楽団とのコラボレーション）

「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、FAX、Emailまたは郵送にて**3月16日（月）【必着】**までにお送りください。ご回答いただいた方の中から**抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼント**いたします。

※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

1　内容について、どう思われますか。
　①よい　②まあよい　③あまりよくない　④よくない

2　「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。（複数回答可）
　①表紙　②名古屋市民文芸祭受賞作品　③随想　④視点　⑤この人と
　⑥ピックアップ　⑦いとしのサブカル　⑧1年をふりかえって

3　今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。

4　今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題や、コーナーがありましたら、ご記入ください。

5　ご回答いただいた方の①お名前 ②性別 ③年代（30代など）④郵便番号 ⑤ご住所 ⑥電話番号

【宛て先】〒460-0008　名古屋市中区栄三丁目18番1号　ナディアパーク8階
（公財）名古屋市文化振興事業団・文化情報アンケート係
FAX：（052）249-9386　Email:tomo@bunka758.or.jp

名古屋市文化基金のご案内

感動を育てる種をまこう。

名古屋市では歴史と伝統を生かした個性豊かな市民文化の創造をめざしております。

名古屋市文化基金（名古屋市市民文化振興事業積立基金）は、名古屋市と市民のみなさま並びに名古屋の文化を応援してくださるみなさまとが協力して基金を積み立てるものです。

この基金とその運用によって生まれる利息は、文化振興のための事業にあてられ、大きく役立てられています。

豊かな文化の創造は、人の心に感動を育み、心を豊かにするものと信じます。

基金の趣旨をご理解いただき、ぜひみなさまのご協力をお願い申し上げます。

みなさまからいただいた寄付金はこのような事業に活かされています

参加・交流
市民が参加し、交流できる事業を積極的に展開しています。

鑑賞
優れた舞台芸術を紹介しています。

支援・育成
市民が行う芸術文化活動を支援・育成しています。

情報発信
当地方の様々な文化情報を発信しています。

NAGOYA GROOVIN'SUMMER

文化小劇場「芸術三昧」1966 カルテット

オペラ・オペレッタ・ミュージカルの名曲で綴る「時間旅行」

■ ふるさと寄附金（納税）制度について

当基金にご寄附いただいた場合、ふるさと寄附金(納税)制度の適用対象となりますので、寄附金額2千円(適用下限額)を超える部分について、確定申告によって従来からの所得控除のほか、寄附金額5千円(適用下限額)を超える部分について、個人住民税からの税額控除を受けることができます。(名古屋市民の方が当基金にご寄附される場合も対象となります。)

問い合わせ
名古屋市市民経済局文化振興室　TEL：052-972-3172
公益財団法人名古屋市文化振興事業団　TEL：052-249-9390

詳しくは、市公式ウェブサイト
文化　基金　検索

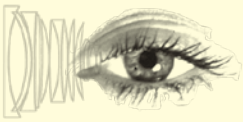
感動を育てる種をまこう。
名古屋市文化基金

一味違う印刷をお探しのあなた！
箔印刷は押してましたが、今は
箔がつくんです!!
（コールドフォイル印刷）

鬼頭印刷株式会社
Tel.052·681·1701 Fax.052·679·1171
data@kito-net.com www.kito-net.com
〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22

○コールドフォイル印刷
○フォログラム転写印刷
○UVオフセット印刷
○バリアブル（可変データ）印刷
○オフセット印刷
○Mac、Win、DTPデータ作成
○B倍プロッター出力

舞台映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

We make you move
舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL(052)735-3151 FAX(052)735-3152 E-mail：mpoffice@pa2.so-net.ne.jp
業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営

平成27年2月25日発行（隔月1回25日発行）通巻361号 編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9385 FAX(052)249-9386 HP http://www.bunka758.or.jp/